地域資源を生かしたまちづくり
― ファッションとアートによる実践的研究 ―

Creative community development using the regional resources :Practical research in the fields of Fashion and Arts

研究代表　水谷由美子*
礒部素男・岡部隆則・森田聖士**
岡田奈緒・田村未奈美***
Research reader Yumiko Mizutani*
Motoo Isobe/Takanori Okabe/ Satoshi Morita**
Nao Okada/Minami Takamura***

キーワード：山口　ファッション　地域資源　まちづくり　モーリ・マスク・ダンス
マスク　メセナ　ファッションショー　田園　商品開発　デニム
Keywords: Yamaguchi, Fashion, regionalresource ,city creation, Mohri-Mask-Dance, mask, mecenat, Fashion show, rural, fashion product development, denim

This thesis is on the creation of the fashion and conveying them which are based on regional resources. We have been doing it since founding our graduate school. Our activity enhanced the network and relationship between industrial circle, shopping arcade and citizens surpassing the field of dress design. As a result, it led to the city creation. Our office activities for it are as follows.

1. Workshop and Contest of Masks which is projected through the achievement of "Mohri-Mask-Dance 13th BLUE MOON in the 21st National Culture Festival Yamaguchi 2006".
2. The project of fashion product development. The keyword is "Denim".
3. About the direction of the cultural performance "Mesena ga tunagu machizukuri".
4. Holding the fashion show. The theme is rural and sea which are natural resources of Yamaguchi and the concept of Denim Kimono.
5. Consideration of the effect to the creator and contribution to the city creation through making regional resource as a theme.

１．はじめに

山口県立大学大学院国際文化学研究科における研究代表者水谷の研究室では、1999年の大学院創設以来、地域資源を生かしたファッションの創作と発信を行って来た。産官学連携で始まったプロジェクト「やまぐち文化発信ショップ Naru Naxeva」を契機として、地域の産業界や商店街さらに市民との繋がりが生まれ、研究代表者の専門分野である服飾デザインの活動が、10年の月日を経て領域を超えて、まちづくりへと広がっていった。

服飾デザインのテーマは1996年以来、山口縁の歴史的テーマである「大内とサビエル」に取り組んだ。ファッションショーは山口における大内とサビエルに縁の場所を選んで、実施して来た。なおかつ、山口市中心商店街でも同日にファッションショーを実施してきた。それは、テーマ性から来る場所選びと地域商店街の活性化という命題に答えるためであった。

そして、10周年に当たる2005年に幸運にも、サビエルの生誕地であるスペインナバラ州パンプローナ市のガヤレ劇場にて、「Yamaguchi Meets Navarra 2005」（注１）を実施できたことは感慨深い体験であった。山口市はサビエルが日本ではじめてカトリック布教を公式に認可された場所であり、サビエル自身が教会を建て、クリスマスのミサが初めて唱えられた場所でも

* 山口県立大学大学院国際文化学研究科教授　Professor of graduate school at Yamaguchi Prefectural University
** 山口県立大学大学院国際文化学研究科２年　2nd grade of graduate school at Yamaguchi Prefectural University
*** 山口県立大学大学院国際文化学研究科１年　1st grade of graduate school at Yamaguchi Prefectural University

ある。

1996年にはすでに山口市はサビエルが生まれたナバラ州の首都パンプローナ市と姉妹都市提携を結んでいた。そして、山口県できらら博覧会が実施された2001年に山口県がナバラ州と山口市と同じ理由で姉妹州・県提携を結んだ。筆者が所属する山口県立大学が山口県の動きに連動して、ナバラ州立大学と学術交流協定を結んだことがきっかけで、提携先のナバラ州立大学に招待を受ける好機を得たのである。

上記の「やまぐち文化発信ショップ Naru Naxeva」は、その創設準備期間である1998年にすでに日本貿易振興機構JETROが主催するLocal to Local事業に応募した。弱小の委員会であったが採択されて、山口からファッション文化の交流のためにスペインのパンプローナとバルセロナにミッションを派遣することになり、筆者はその団長として出かけた。

その結果、地域の山口県繊維加工協同組合と大学が連携して、第1回山口新人ファッションデザインコンテストを山口で実施することになった。このコンテストは惜しまれながらも2009年の本年度、10年目で最終回を迎えた。山口新人ファッションデザインコンテストは、第2回目にジャパン・ファッションデザインコンテストイン山口と改名され、産業界から「メイドinジャパン」というコンセプトが生まれて来た。さらに、西日本におけるデニムファッションの製造拠点である山口の特徴を生かしデニムファッションのコンテストになった（注2）。その後、このコンテストが全国に広がって行く中で、地域でもデニムのファッションコンテストが認知されて行った。

2006年に第21回国民文化祭やまぐち2006が開催され、ファッション推進委員会が立ち上げられた。そこで、筆者は推進委員長として21世紀の展望を見据えて、デニムに注目することを提案し、5つの自主事業を計画・運営することになった。

すでに先の研究報告で詳細は述べているのでここでは紹介に留めるが、特に「街じゅうデニム－ファッション＆アート－」（注3）というプロジェクトを実施し、それに市民が多く参加したことは注目に値する。山口市中心商店街では、店舗の内外やアーケード街にオリジナルのデニム作品やデニム人間が溢れた。

制作や装飾さらにワークショップなどに老若男女の多くの方々が参加したことで、山口市ではデニムと山口という関係が定着するきっかけとなった。

以上のようなファッションショーからまちづくりへ、そしてデニムによるファッションとアートの実践の経過を経て、筆者は研究室メンバーとともに、歴史的資源として「大内とサビエル」、ファッションおよびアート素材として「デニム」を2大テーマとして取り上げて来た。さらに、山口県立大学が取得した文部科学省現代GP（地域活性化・地元型）のプロジェクトの一環で、山口の自然資源である田園そして海をテーマとしたファッションショーを開催してきた。

本論はこのような研究室のプロジェクト研究の内、2009年度に実施した研究創作活動について、記述するとともに自ら検証しようとするものである。これらの研究は研究室全員が関わって、それぞれの役割を分担しながら実施しているものだが、それぞれの部門リーダーが実践と検証を述べている。研究代表である筆者は、全体の監修をするとともに、研究室の研究創作のスタンスに立って、全体を統括したものである。

まず第2章では、礒部素男が中心になって実践した「マスク創作ワークショップとコンテスト」について述べる。マスクをテーマにしたのは、第21回国民文化祭やまぐち2006のファッション推進委員会のプロジェクトの一つとして毛利臣男氏を芸術監督として招き、市民とプロが共同で制作した「モーリ・マスク・ダンスPart 12 BLUE MOON」の成果を踏まえて企画されたものである。

礒部は山口市役所の職員として、上記国民文化祭でファッション推進委員会の事務局として活躍した。それがきっかけとなり、山口県立大学大学院に入学し、ファッション＆アートの分野でこの3年の間、いくつものプロジェクトを精力的に行ってきた。市民の間に形成されたネットワークが功を奏して、創造的機会が創出されてきている。

第3章では、デニムをキーワードに実施した商品開発プロジェクトであり、山口まちづくり会社との連携で行われたものである。特にデニムの製造過程で廃棄されるデニムの耳をテーマに、エコロジカルな視点を強調し、生活グッズを製作している。ここでは商品開発のマネジメントを担当した岡部隆則が執筆を担当する。

第4章では第14回全国メセナネットワーク山口大会「メセナがつなぐ町づくり」文化公演の演出を、演劇活動で脚本や演出を手掛けている森田聖士が担当した。出演団体「山口市おかあさんコーラスの会」「山口室内オペラ工房」「山口鷺流狂言保存会」そして「山口県立大学服飾研究会」の4団体の異なった分野の表現をいかに一つの舞台にまとめたかについて、述べるとともに地域における芸術振興についてメセナの役

割などを述べている。

第5章では第4章のイベントに山口県立大学服飾研究会（代表：水谷由美子）が「Yamaguchi Fashion －田園、都市そして海との共生－」をテーマにしたファッションショーで参加した。そこで、地域資源をどのように生かしたファッションの創造をしているのか、個々のパートのコンセプトや作品について記述し検証する。岡田奈緒は「大地の妖精」をテーマに創作した子供服について、また、田村未奈美は「ジャポニスムと海」をテーマに創作した作品ついて述べている。

さらに、筆者はデニム着物についてコンセプトを述べるとともに検証する。

最後に地域資源をテーマにすることによって、どのような効果が研究創作者に生まれるか、またどのようにまちづくりに貢献しうるかなどについて考察する。（文責：水谷）

２．マスク創作のワークショップとマスク・コンテスト

（１） イベント実施の目的

筆者は自分が住む地域である山口市を創造都市に向けて活性化させることを研究テーマに実践的研究を実施している。ここでは創造都市を文化芸術等を活用してまちの創造力を高め、その創造力によりまちが抱えるさまざまな課題を解決し、まちを活性化させていく都市政策と位置付けている。

創造都市形成のために筆者が行う実践的活動は、文化・芸術等を通して発揮される創造力が人やまちにどのような影響を与えるのかを検証するとともに、1つ1つのイベントを積み重ねていくことで人やまちの創造性を育てていくことを目的としている。

こうした目的のもと、これまでにいくつかのイベントを実施してきたが、今回のイベントは、創造都市を形成するうえでの実践としてこれまでのイベントとは異なる要素を加えた。2008年に実施した「サンタファッションコンテスト2008」においては地域住民の自発的な活動を支え、創造的交流の場を設けることに重点を置き、コンテストで普段交流のないファッション創作活動のグループがコンテストを通じて交わり、刺激を受け合った。

今回はプロのアーティストである毛利臣男氏の支援を受けて、実験性を内包したものづくりを目指した。具体的には、シリーズ作品「モーリ・マスク・ダンス」という固有の表現スタイルを創造した毛利臣男氏に依頼し、マスク制作のワークショップを行った。また別の企画でマスク・コンテストを実施することにした。

（２） 創造都市の実践における分類

今回のマスク創造の活動を創造都市論の中で位置付けるために、小長谷一之が『まちづくりと創造都市―基礎と応用―』の中で示している分類（注4）を参照する。ここでは空間の創造、人の創造、地の創造そして産業の創造に分類している。以下では、この分類法を参考に4つのカテゴリーを考えてみる。

①空間の創造

創造性あふれる場とは、その地域が持つ自然や歴史といった個性的な部分に着目し、そこに文化的な要素を加えることでその場が新しい価値を持つことである。代表的な例としては産業遺構や歴史的建造物を文化・芸術的な用途に転換し再活用していく方法である。

また、アーティストやクリエーターといった創造的な仕事についている人間は、こうした創造的な雰囲気を好み、こうした場に集まってくるとのリチャード・フロリダの分析がある。（注5）

②人の創造

創造的なまちとは、創造的な場があるだけでは十分ではなく、そこにソフトを組み込むことが必要となる。そうしたソフトを作っていくには、アイデアや創造性に富む人の存在が不可欠であり、そうした人の創造性を涵養していくことが大切となる。

③知の創造

創造的な場所ができ、創造性あふれる人が集まったり、創造性が発揮されていくことで、新しい知が作られていく。特にアートやサイエンスといった分野にこの傾向が強く現れて、こうした知がビジネスにおける「高付加価値化」や「差別化」のもととなる。

④産業の創造

産業振興の視点から創造性に着目するもので、産業やものづくりといったジャンルに文化芸術という創造的な視点を加えることで、既存産業の高度化や新産業の創出といったものが生まれる。事例としては、デザインや異なる技術を加えることで工業製品とは違ったものを生み出したり、全くジャンルの異なるイベントと連携することで新しい使い方や生活を提案するといった手法が報告されている。

以上のように①から④の様々な創造が創造都市を形成する要素となっており、いずれも欠くことのできない創造活動である。しかしながら、小長谷一之の分類は発展段階的なものとして４つの創造のカテゴリーを示している。

今回、筆者が取り組みとして目指す対象は、「人の創造」である。人の創造は、容易に行えるものではない。一つひとつの活動の積み重ねが、創造的基盤形成にじわじわと浸透して行くような性質のものである。また人の創造は個人の創造性を育成して行くという教育的方向性と結果のグレードや目的設定によって、プロ化して行く可能性があり、産業への創造的可能性をも秘めているものでもある。

（３）　アーティストと市民とのコラボレーション

本イベントは、市民の創造性を涵養することが大きな目的であるが、あわせて、現代社会において会話や交流の機会が少ない世代がコミュニケーションをはかる手段として、さらに、まちなかにおける集客やにぎわいを創出する手段として、文化・芸術活動がどのように力を発揮するかを探ることも目的とした。

また、今回は、創造性を効果的に高めるために、プロのアーティストに協力を依頼した。

山口の街には、文化芸術分野の趣味の会や文化教室といったものがあふれているが、そうしたものとの差別化をはかり、人を呼び、さらに文化芸術的なブランドを高めていくうえでも、プロの存在が不可欠であり、必要な戦略であると判断した。

今回のイベントでは、その人材として、山口県立大学国際文化学部客員教授の毛利臣男氏からワークショップの講師の快諾を得ることができた。

毛利氏は、1970年代以降長くファッション界でアートディレクターとして空間演出やデザインの分野で活躍するばかりでなく、世界の数々の舞台衣装を手掛けて来た。特に日本では、「ヤマトタケル」をはじめとするスーパー歌舞伎の舞台衣装や装置など舞台芸術で特に有名である。また世界のオペラ、バレエそして演劇などの舞台衣装や装置さらに衣装や布を使ったインスタレーションや仮面舞踏劇「モーリ・マスク・ダンス」（注6）などジャンルを超えた幅広い分野で活躍をしている。ここではスペースの関係で詳しく述べられないが、詳細は水谷由美子『毛利臣男の劇的空間－舞台・ファッション・アート－』（注7）に紹介されているので、参考にされたい。

筆者は前述の第21回国民文化祭が山口で実施された時以来、地域の子供会や老人会そして大学生などとのネットワークと信頼関係を形成してきた。そこで、このネットワーク間の交流を発展させ、さらに創造的な関わりを強化することがいいのではないかと考えた。毛利氏は20歳から若者に創作を教えてきて、一人ではできない力強い表現を共同で実施することの意義を唱えて、「コラボレーション美学」という造語を作り提唱している。この考えに筆者は共感し、「モーリ・マスク・ダンスPart12 BLUE MOON」のプロデュースに関わった。

その時に、マスク制作と同時にそれを付けて身体表現した若者が自己を解放し、みるみる内に表現にのめり込んで、家族だけでなく回りの人々へのコミュニケーション力を身につけていったのをこの目で実見した。

そこで、毛利氏、水谷教授と3者で会合を数回もった。「モーリ・マスク・ダンス」では、舞台上の表現者の内、プロ以外の一般の参加者は自らマスクを制作し、マスクを身につけ、演技や舞踊などのパフォーマンスを行う。毛利氏は、マスクをつけることで舞台にあがった者は、恥じらいから開放されてその内面が現れてくると語っている。

そこで、時間的なこと、規模によって生じる予算の点などを考慮して、マスク創作をするワークショップとコンテスト形式のパフォーマンスを企画した。さらに商店街の賑わいの創出ということも視野に入れて、コンテストの前にパレードをすることも提案した。

（４）　マスク制作のワークショップとコンテストの実施

①マスク制作のワークショップ

今回のワークショップのテーマは「ぼくとわたしのヒーロー・ヒロインマスクづくり」とした。参加者にはマスクを被って自分の夢の存在を表現してもらうにはどのようなテーマがよいか。テーマを検討した結果、ワークショップを実施する山口県立美術館にて「大ナポレオン展」が開催予定だったことをヒントに、上記のテーマに決定した。

具体的な実施方法や内容は以下のようなものである。

〈日時/場所〉

１回目：2009年8月8日（土）16:00 ～
（場所：山口県立美術館講座室）

２回目：2009年8月11日（火）14:00 ～（場所：同上）

※夏休みの期間中であり、多くの人の参加を期待して2回の開催とした。

〈対象者〉

前述のとおり文化芸術活動を通して、世代間のコミュニケーションをはかるということが今回のワークショップの目的でもあることから、参加者は子供（主に小学生以下）と大人（特に会話の機会が少ないと思われる父親、祖父母）のペアによる参加とした。

〈内容〉

まず、ワークショップの前に、参加者にヒーロー・ヒロインの参考となる図像を示すために、ワークショップの会場であった県立美術館で開催中の「大ナポレオン展」を鑑賞する時間を設けた。山口県立美術館普及課長の河野通孝氏に解説をお願いして、歴史的な絵画を身近に感じてもらうように工夫をこらした。

毛利臣男氏には、講師として自身の作ったマスクについて語ってもらい、あわせて制作の指導をお願いした。ワークショップでは、講師の毛利臣男の講演、そしてマスク作りのデモンストレーションの後、参加者個々のマスク作りを行った。

具体的な方法としては、主催者が用意した厚紙をまず切って、マスクの土台を作ることから始めた。その後、マスクに彩色したり、色紙や布などを使ってヒーロー・ヒロインの顔のイメージを表現した。

最後にはゴムひもをつけることで自身が被れるマスク（お面）を作り上げた。

研究室の他の院生はスタッフとして、参加者の各テーブルに入り作り方の見本を示しながら参加者とともに制作に加わり、制作の趣旨や方法などを伝えるサポートを行った。

②マスク・コンテスト

マスク・コンテストは「ぼくとわたしのヒーロー・ヒロインマスクパレード＆コンテスト」と命名した。このキャッチコピーのように、マスク・コンテストと同時に商店街の活性化を目指して、パレードを行って広く地域の賑わいを創出することも目的とした。

〈日時/場所〉

2009年9月12日（土）（場所：山口市中心商店街　みずほ銀行前特設ステージ ）

〈対象者〉

パレード＆コンテストでは、8月に行ったワークショップの参加者の中から、作品が完成し、コンテストに参加できる希望者を募った。特に、ステージにあがるという機会がない大人の積極的な参加を期待した。

〈内容〉

ワークショップで制作したマスクを被り、参加者がファッションショー形式でステージにあがり、ヒーロー・ヒロインになった気持ちで自由にポーズをとるというパフォーマンスでコンテストの内容を考えた。

コンテストの審査には、毛利臣男氏、コンテストの会場となった米屋町の協同組合米屋町振興会理事長である藤本利明氏（山口市商店街連合会会長）、水谷由美子教授の３名に審査を依頼した。

また、コンテストの前にはイベントのPRを兼ねてマスクを被った参加者が商店街（アーケード）を行進し、街行く人にチラシを配布した。

（５） 結果と考察

ワークショップについては、1回目が30名、2回目が32名の参加者があった。当初はより多くの人の参加を期待していたが、スタッフが補助しながら参加者個人個人がものを作っていくこの種のワークショップでは、これ以上の参加数ではコントロールができなくなる。そういう意味で、結果的にちょうどよい人数の参加者を得たと言える。

参加者の組みあわせとしては、親子（特に子供と母親）での参加が最も多く、祖父母との参加は１組程度であった。また、親子との参加に、子供の友達が一緒に参加するという形も何組か見られた。

当初は、特に子供との会話の少ない世代間との参加を想定していたが、現実には日常において最も子供と接する機会が多い母親との参加が中心になってしまい、現代の家族のつながりの特徴を現したような結果となった。父親や祖父母というように参加者を限定してしまうやり方もあったが、それをすれば参加人数が減ることは明らかであり、集客（参加者）数がイベントの成果の判断材料となるなかで、参加しやすい方法を選ばざるを得なかったというジレンマもあった。

目的のひとつであった世代間のコミュニケーションは、そうした参加者の組み合わせであったことから顕著な効果があったとは言えないが、筆者の個人的な感想としては、大人と子供がマスク作りという共通の創作活動をとおして、見守ったり、指導したりという普段の親子の関係とは違った、同じ活動をしている者同士の連帯感といったようなものが生まれていたような印象を受けた。

作品については、参加者がそれぞれ自由な発想においてマスクの顔を描いていき、講師である毛利氏に自分のイメージを伝え、作り方などを教わりながら作り上げる参加者も多くあった。子供たちはアドバイスを受けて、自分のイメージが具体化する喜びを感じたようだ。また、毛利氏の個性豊かなマスクと、氏のわくわくするようなアドバイスの言葉から参加者は創作のモチベーションを大いに上げ、作り終えた後、マスクを被って歩き回る子供たちの様子には、ある種の満足感や達成感が感じられた。また、マスクを外した後の子供の顔の表情には、個々人のヒーローあるいはヒロインになったような凛々しさや美しさが見受けられ

た。

次にマスク・コンテストパレードについては、エントリー作品が全部で23点、そのうち子供の作品が19点、大人の作品は4点であった。ワークショップの参加者と比較してエントリーが少なかったのは、イベントを開催した9月の最初の土曜日が小学校の運動会とバッティングしてしまったことが一因である。

また、参加者が子供に偏ってしまったことを分析してみる。このコンテストは商店街の屋外ステージで、ファッションショーの形式で参加者が舞台にあがるというものであった。それ故に、一般の大人にとっては、ものをつくるという創作活動以上に、自分の体でパフォーマンスをすることに抵抗があったのではないか。創造性を育むためには、いろいろな種類の創造活動が必要である。今後は、マスクづくりだけでなく、実際に被ってパフォーマンスをすることをワークショップに組み込むことで苦手意識が解消されるかもしれない。

実際にエントリーした23作品の表現者は、ステージ上において伸び伸びとしたパフォーマンスを見せ、それぞれのヒーロー、ヒロインが表現された。一つのショーとして、今まで山口で見ることがなかった新鮮な舞台が生まれたと、観客からは非常に好意的な意見を聞いた。

特に小学生の子供たちは躊躇なく自由に表現していた姿から、人に見せる、あるいは見られることの快感を味わっているように感じられた。人前で小さい頃から自己表現をする体験を持つことは、創造性を育む上で特に重要であることがこのコンテストを通じて理解できた。

もうひとつの目的であるイベントを通した集客や商店街での賑わいの創出という点では、事前にパレードを行いPRに努めたが十分な成果とはならなかった。事前の広報活動や周知活動といった点において、またイベントをどのように戦略的に行うかという点で課題を残した結果となった。

その背景には研究室で同じ時期に連続してハードなプロジェクトを実施していたために、十分な力をメンバー全員で注ぐことができなかったことが反省点である。

（6）　まとめ

ここで地域資源の活用という視点から、今回の企画の検証をしたい。

今回のイベントは、講師を快く引き受けていただいた毛利氏の役割が大きかった。創造都市を形成していくという取り組みのなかで、毛利氏のようなアーティストに加わってもらえることは、より大きな効果を生む。

今日、地元のアーティストと地域をつないで活性化を図ろうとする地域が全国的にも多くみられ、山口市においても、２、３年前から地元アーティストの育成に力を入れる動きが出てきた。本来は、こうした取り組みによりアーティストが育っていき、一流になってまた地元のために貢献するという図式になるのだろうが、それは長い歳月をかけて初めて成立するものである。

毛利氏は山口の生まれではなく、山口に在住したこともないアーティストではあるが、10年という長い歳月に渡り山口とは深い関わりがある。2000年からジャパン・ファッションデザインコンテストin山口の審査員長を務めてこられたこと、また、第21回国民文化祭やまぐち2006ファッションフェスティバル部門でモーリ・マスク・ダンスの芸術監督を務められるなど、ファッションを超えて山口の文化や歴史への理解や市民との交流が積み重ねられている。ただ、時間的な積み重ねだけでは芸術家を招き、その成果を地域に落とし込むことはむつかしい。イベントや人との繋がりが一過性に終わることも多い。

今日は毛利氏が関わってこられたものとは比べものにならない規模と内容のイベントであったが、毛利氏の情熱的な参加を得られたことは、長年に渡って信頼関係を大切に築いてこられた水谷教授の功績でもある。人の情熱は人の情熱で動くということを体験した。

また、毛利氏とイベントやまちづくりの話をしていく中で、仕事としての芸術活動以外に、一人の人間として社会に対してどういった貢献ができるのかを毛利氏は常に考えていることがわかった。島根県松江市で毎年4月に開催される武者行列の祭りをプロデュースしたり、海外の刑務所において、服役者に表現活動を行うことで社会復帰の訓練を実施したりといった毛利氏の活動は、そうした氏の思いから行われているのである。

人やまちが創造的になるためには、こうしたアーティストの思いや取り組みを積極的にまちづくりの中で活かしていくことが重要である。

アーティストの考えを理解し、市民に伝え、地域とのつながりを作り、まちづくりを側面から支えてもらえれば創造都市実現への大きな力となるのではないだろうか。

つまり、地元に愛着を持ってもらえるアーティスはいわば地元の大切な宝物（資源）なのである。

そして、筆者はそのアーティストとまちや市民をつなぐ役割として、こうしたイベントにかかわる意味があるとの認識を強くした。いわゆる企画・プロデュースやコーディネート機能は、未知なる人と人、人ともの、人と土地などの出会いを生み出す触媒となる。今後、ますますこのような機能を実践する人が多くなることで、地域の創造性や活性化が推進されるに違いない。（文責：礒部）

３．デニム33 の 街知箱とアートふる山口 における実践

（１） 実施背景

現在、日本各地で地域資源活用、地域活性化、地域ブランドといった言葉をよく耳にするようになり、実際に各地でそのような活動が行われている。また、2007年の「中小企業地域資源活用促進法」等、地域資源を活用したブランドを行政サイドからも後押しする傾向が強くなり、その活動に拍車がかかっているといえる。

山口には自然、歴史、文化、伝統、技術そして産業など、全国へ発信できる地域資源が豊かに存在している。しかし、まだまだそれが的確に全国に発信されているとは言い難い状況である。

そのような中で、繊維産業に関して、2007年にデニム製品が山口県の地域資源として認可を受けた。山口市中心商店街ではデニムをテーマとしたイベントが盛んに行われたり、デニムがテーマのコンテストが行われたり、新しいブランドが立ち上がったりしている。このように、地域資源を生かした、地域ブランドの創設や事業、文化活動が活発に行われている。しかしながら、ある調査によると地域ブランドと地域名称の知覚指数を表すPQ（注8）では山口は全国で34位と下位を示している。

筆者は山口県自体や地域ブランドの知名度を更に向上させ、地域活性につなげる為には、今後も新たなイベントや試みが継続的に起こることにより、総合的に地域をアピールし続ける事が、地域活性化の一翼を担う事になるのではないかと提起したい。

当研究室は以前よりデニムをテーマとしたファッションショーや服飾制作を多くしている。また筆者自身普段は主にデニムを商材としたアパレル関係の仕事に従事している。社会的な経験を踏まえて、本研究において筆者は単なるデザイン制作という視点だけでなく、企画プロデュースの視点からも地域の方々と協力し、地域的インフラ（人・技術・素材）など地域資源を活かした商品開発、発信事業の実践研究をすることを目指している。

（２） 概要

今回の実践研究においての商品開発にはデニム生地生産の際に出る「デニムの耳」に注目した。デニムの耳は、結果的に捨てられてきたごみである。デニムに関するエコロジーの観点からこの「デニムの耳」に着目した。デニムの耳について少し詳細に触れると、デニム生地を織り上げた後に切り落とされる端の部分で、日本のデニム業界では１日に約200キロメートルの耳が廃棄処分されているといわれている。このデニムの耳を活用し、「エコ」な商品作りを実現させたいと考えた（注9）。また、株式会社街づくり山口との共同企画により、山口の中心商店街にて、これらのコンセプトを盛り込んだオリジナル商品を製作し、約一ヶ月間にわたる販売イベント活動を実施することとなった。

特にタイトルのデニム33（サンサンと読む）の33は耳とも読めるので、これを掛け合わせて命名した。また、商品を販売する実験なので長い期間実施した方が効果的である。それ故に、33日間の販売期間を想定した。タイトルは「デニム33　街知箱へ行こう」とし、日時は21年7月21日～８月22日の33日間とした。

売り場は、株式会社街づくり山口が運営している「街知箱」（住所：山口市中市町３-10運営：山口商工会議所内）に場所を借りた。街知箱は山口市中心商店街にある「小さなショッピングモール」をコンセプトに山口発ブランドの発信基地を目指す店舗である。今回は山口県立大学水谷研究室と山口県立大学発ベンチャー企業である有限会社ナルナセバ、そして株式会社街づくり山口が共同で企画・運営をしたものである。

街知箱の協力により、33日間店舗内に設置されたボックス型に作られた商品陳列棚の内、6つのボックスと店舗奥の店舗兼ワークショップスペースを借用することができた。

（３） 商品について

店舗の場所が山口市中心商店街にあるという事で、地理的な特性から、ある程度販売層の幅が広いと考え商品アイテムを複数用意する必要があった。そこで、学生や子供連れの母親そして年配の方までが興味を持ってもらえるような商品を製作することにした。また、商品には既存の商品にはないオリジナリティを出

す為に機能性とデザイン性の両方を満たしつつ、他商品との差異付けが可能な特徴のあるものを開発することを目指した。

また、全ての商品にデニム素材を使用し、前述した「デニムの耳」を意識的に活用した。一部の商品には木の廃材や残布をも利用し、全体にエコロジカルな商品開発を基本的なコンセプトとした。これは結果的にコストパフォーマンスを上げることを可能とした。

具体的な商品について、以下に箇条書きで示す。

・エコトートバック（680円）：材料はデニム、持ち手の紐の長さを調整できる事により、手に持つときも肩にかけるときも調度良い長さに調整できるもの。
・ポケットポーチ（750円）：カラーデニムの残布を使用、色のバリエーションが豊富なもの。
・日よけ帽子（600円）：首筋までの日焼けをカバーすることができるもの
・日よけ三角巾（500円）：家庭菜園や農作業をする時にかぶるだけでなく風呂敷にもなるもの
・お絵かきパズル（500円）：託児所や子供がいる母親に向けた子供用おもちゃで、木の廃材を利用したもの
・指人形（350円）：一つ一つの指に違う表情をつけた指にはめて遊べるおもちゃ

開発の方法については、各アイテムの具体的なデザインについては、筆者がディレクションをして、研究室メンバーが担当した。(注10)。

（４）　広報活動

一般に商品販売活動の上で非常に重要なウエイトを占めているのは、パブリック・リレーションズを効果的に行う事である。そのために、わかりやすく覚えやすいイベントのネーミングの作成やチラシ・ポスターの作成・配布、また、テレビでの呼びかけを行った。前述したように、販売期間は約1ヶ月間程度の場所借用が可能だったので、今回の企画テーマである「デニムの耳」にちなみ33日間の販売を企画した。実際に広報宣伝して情報が浸透するまでには一定期間かかるので、１か月というのは最低必要な時間であった。

広報手段としてポスター・チラシには、商品開発コンセプト、商品情報そして販売情報などを掲載した。特にチラシを1500枚作成し、山口市中心商店街を中心として20箇所以上に置きビラを配布した。さらに、ポスターを市内の主な場所に掲示依頼をした。また実際に街頭に出て手配布も行った。手配布については、販売期間の間、4度にわたり中心商店街にて行った。また、販売イベント自体をより身近に、愛着を持ってもらい、より良く本イベントを覚えてもらう為に、キャラクターを考案し、またその着ぐるみを制作した。着ぐるみは普段は店内に展示しておき、チラシ配布などの時は実際に着て街へ配布活動に活用した。また、地元の雑誌や、ケーブルテレビ等での宣伝広報活動を行った。

（５）　アートふる山口

また、同商品は2ヵ月後に山口で開催されたアートふる山口にも「デニム33　inアートふる山口」と題して、有限会社ナルナセバ（山口市大殿大路246-１）の会場にて、会期の2009年10月3日（土）～10月4日（日）の2日間、店舗出店した。

アートふる山口とは、1996年から毎年10月上旬に山口県山口市の一の坂川沿いおよび竪小路周辺を中心に開催される、芸術（アート）をテーマとしたイベントである。イベント期間中は、山口市内の「一の坂川」周辺から「竪小路」筋周辺の民家やお店など、約80軒を手作りの小さな美術館に見立て、展示品や販売が行われる。今年は第14回目のアートふる山口を迎え、ここで我々のプロジェクトは街知箱で販売した商品や、ポップをそのまま持ち込み、筆者が代表取締役を務める有限会社ナルナセバの協力の下、店舗販売を行った。

残念ながら、街知箱での販売で商品在庫が少なく、また、店舗来客が好評だった事も手伝い、初日で殆どの商品が完売してしまった。会場に訪れた人からは、商品コンセプトやデザイン、機能的特徴に対して高評価を得たことは幸であった。

（６）　まとめ

オリジナル商品を約1ヶ月販売する事が出来たことで、様々な試みを行えたことは大きな成果だった。また、販売に至っては、6アイテム約120点が完売する事が出来た。また、企画のコンセプトに興味を持った県内外のメディアからの問い合わせが多くあった。たとえば、山口から遠く離れた東北のメディアからの取材や、全国紙、インターネット新聞等幅広い注目があり、パブリシティ効果も高かった。これらは非常に大きな成果だったといえる。

今後に、ファッションプロダクトの企画プロデュースを行う上で、販売イベント出品者側に地域・地元の人たちを巻き込むこと、スペース的な販売規模を工夫する、限定地域だけではなくインターネットなどを活

用した販路拡大、広報戦略そして低価格販売でなく付加価値を高めた適正な価格での販売など、収益なども視野に入れた多くの課題がある。

しかし、本イベントでの販売結果や周囲の反応、各メディアの反応の高さから、山口県における地域資源（デニム）を活用した活動が、山口から全国へ発信され、地域活性化の一翼を担うことができたのではないかと考えられる。今後、これらの活動を通じて地域の活性化をより現実的なものにするためには、効果的で持続的な企画プロデュースを産業的に結びつける事が重要になってくるはずだ。（文責：岡部）

■テレビ・ラジオ・新聞等掲載情報

- 山口ケーブルビジョン「ソレーネ　－90チェック－」7月14日放送分（1週間）
- 山口ケーブルビジョン「ねっちり」7月7日から1週間放送
- サンデー山口「デニムの耳を商品に！ 県大生らがエコに挑戦」7月18日
- サンデー山口Web版「デニムの耳を商品に！ 県大生らがエコに挑戦」7月18日
- 東北放送「ロジャー大葉のラジオな気分」8月10日放送分（約十分間の生放送出演）
- 山口宇部経済新聞　『「デニムの耳」でエコ商品－大学生が考案、「耳」にちなみ33日間販売』7月21日掲載
  http://yamaguchi.keizai.biz/headline/661/（アクセス日2009/7/21）
- Yahoo!ニュース　みんなの経済新聞ネットワーク『「デニムの耳」でエコ商品－大学生が考案、「耳」にちなみ33日間販売』7月21日掲載　（山口宇部経済新聞より転載）
  http://headlines.yahoo.co.jp/hl?a=20090721-00000037-minkei-l35（アクセス日2009/7/21）
- 繊研新聞「素材商社」8月12日（第4面）

４．第14回全国メセナネットワーク山口大会「メセナがつなぐ町づくり」公演

（１）「メセナがつなぐ町づくり」公演実施の背景

文化芸術活動は、演者（パフォーマー）と観客（オーディエンス）だけでは成立しない。そこには、支援者（パトロン）の存在が不可欠である。行政や企業、そして個人からの支援なしでは、現代の文化芸術活動の持続はなしえない。山口メセナ倶楽部は、1994年に創設され、新しい固有の文化を創造していく地域の芸術・文化活動を助成支援している。山口の文化芸術活動を支えるパトロンといってもいいだろう。本公演は、普段は芸術活動を支える立場であるパトロンの山口メセナ倶楽部が主催し、その支援を受けた団体（パフォーマー）が出演するという、特殊な形態の公演である。日本各地には、地域の文化振興をめざし、地元の芸術・文化の支援活動を行うメセナ組織が多数存在する。その形態は、地元企業の連合体、財団･社団･NPO法人、行政と企業の協働組織、市民と企業で作る会員組織など様々である。そして、このような各地のメセナ組織の交流・情報交換・協力をはかることにより、各組織のメセナ活動の発展と地域の文化振興に寄与することを目的とし、「全国メセナ組織連絡会」が発足した。その後「全国メセナネットワーク」と改称した。

そしてこのネットワークは年1回、全国各地で全体会議を開催し、情報交換と交流の機会を設けている。その全体会議が、2009年度は山口メセナ倶楽部がホストとなり、山口で開催されることとなったのである。毎年、全体会議には各地の特色を活かした講演・シンポジウム・交流会・文化鑑賞等のプログラムがある。今回の山口大会では文化鑑賞として、これまで山口メセナ倶楽部が助成してきた団体による記念公演をすることとなり、その記念公演において筆者は、演出という仕事を任されたのである。

ここで、筆者が本公演で演出として参加することとなった経緯として、筆者の指導教員であり、山口県立大学服飾研究会の会長でもある水谷由美子教授の推薦があったことを述べておきたい。山口メセナ倶楽部は、助成した団体の中から、年間を通じて顕著な功績のあった事業に「読売山口メセナ大賞」を贈呈しているのだが、今回の記念公演には、過去に大賞を受賞した4つの団体に出演していただくことになった。その1つとして、同研究会の出演が決まった。そして会議の中において、水谷教授が筆者を公演のまとめ役として参加させてはどうか、と提案されたのである。

そもそもメセナ倶楽部は文化事業を金銭面で支援する組織なのであって、今回のように自らが主催となって企画運営することがないのである。さらにそれがステージでの公演ともなると進行はもちろん、本番を迎えるまでの打ち合わせや段取りも経験がないため、誰を中心として動いていくのかを決めかねていたそうである。そこで水谷教授は、企画・プロデュースを学んでいる筆者を、その実践的研究の一環として推薦して下さったのである。

このような経緯があり、筆者が公演のまとめ役である「演出」という立場で参加することとなった。山口の文化芸術活動の代表ともいえる、4つの団体が出演する貴重な公演を任されたことは、非常に有意義で素晴らしい経験となった。

概要

第14回全国メセナネットワーク山口大会「メセナがつなぐ町づくり」文化公演

主催：全国メセナネットワーク
　　山口メセナ倶楽部
日時：平成21年10月2日（金）　18：30 ～ 20：30
会場：山口情報芸術センター
出演：山口市おかあさんコーラスの会
　　山口室内オペラ工房、山口鷺流狂言保存会
　　山口県立大学服飾研究会

（２）「メセナがつなぐ町づくり」の構成

本公演では、「メセナ」をキーワードに、地域社会における文化芸術の意義や、その担い手・支え手である企業や市民が果たす役割について考え、魅力あるまちづくりとして文化芸術活動が広がっていく契機となることを目指すことを目的としている。この公演を担当しておられた山口メセナ倶楽部事務局の山崎麻里氏は、「本公演では、『山口で活動している様々な文化芸術活動を、山口メセナ倶楽部が影で支えている』ということをたくさんの人に知って欲しい。また、これを機に支援者と支援事業の両方が増え、そして山口の文化芸術が発展していけば素晴らしいことです」と述べられていた。

全国よりメセナの関係者が訪れるため、この公演は山口メセナ倶楽部が支援することで「つないだ」地域の文化芸術を全国に紹介する素晴らしい機会であり、同時にメセナの支援によってこのような文化的活動ができるのだと、観客（オーディエンス）に知ってもらう機会でもある。この観客の中には将来における支援する側（パトロン）とされる側（パフォーマー）が存在し、その双方へのアプローチが可能である。両者の数が増えるということは、山口の文化芸術活動が活発になり、その量も質も発展することにつながる。

このように、山口メセナ倶楽部にとってきわめて重要な公演であることを筆者は認識していた。そのため、支援する側である会員の募集と、支援される側である支援事業の募集を呼びかけた。その方法として、スライドショーを使用した。開演30分前の開場中に「山口メセナ倶楽部　15年のあゆみ」と題し、これまで支援してきた事業と各年度の読売メセナ大賞を受賞した事業を、その活動写真や公演のチラシなどで紹介した。山口市で活躍している様々な文化団体を影でメセナ倶楽部が支援しているのだという、メセナ倶楽部の想いが伝わるように15年の歴史を紹介した。

また、チラシにおいてもメセナ倶楽部の想いをコンセプトに取り入れ、作成に取り掛かった。デザインは筆者と同じ山口県立大学大学院で環境芸術を専攻している眞鍋廣亜貴氏に依頼した。公演のチラシとは別に、シンポジウムや講演も含めた全体のチラシも作成した。それぞれのコンセプトは以下のようである。

まず、全体チラシに掲載されたものを参照する。「人と人が手を取り合うことで未来は切り開かれていく。メセナと芸術家達が手を取り合うことでその土地に新たな未来が切り開かれ、大いなる躍進を遂げる。」さらに、文化公演用のチラシでは、「メセナ倶楽部が山口の文化活動を支えている」というコピーがあり、これを象徴的に表すためにメセナ倶楽部を、まちを明るく照らしている街灯に見立ててデザインした。

（３）「メセナがつなぐ町づくり」の演出

公演は2時間程度ということなので、各出演団体には、20分程度を目安に自由に演目を設定していただいた。大賞を受賞した演目という指定をしなかったのには理由がある。先ほども述べたように、この公演は山口の文化芸術活動を全国の皆さんに紹介するという側面も兼ねている。そのため、過去ではなく現在の活動成果を観ていただきたいと考えた。よって筆者は、公演全体の演出というよりは、各団体の特徴が十分に発揮できるようなスタンスに徹した。MCが各団体の紹介をした後にパフォーマンスをするという流れ、出演順番、各団体20分という時間を設定し、あとはそれぞれの団体が自由にステージを使ってよい状態にした。そして、各団体の出す要望をできる限り実現できるように努めた。

その過程において立場上複雑だったのは、私が主催であるメセナ倶楽部の人間ではないということである。そのため、予算に関しては決定権がなく、メセナ倶楽部との予算のすり合わせに時間がかかってしまい、出演者の要望に素早い対応ができなかった。これは今回の公演の反省点であり、欠点でもあった。

時間は多少かかってしまったのだが、会場である山口情報芸術センターのスタッフ、そして舞台を担当する、やの舞台美術のスタッフとの打ち合わせを何度も重ね、4つ団体が納得のいく舞台づくりを完成するこ

とができた。

（4） まとめ

パトロンである山口メセナ倶楽部は、山口の文化芸術の発展のために、素晴らしいパフォーマーとの出会いを望み、新しいパトロンの誕生を求めている。もちろんパフォーマーも、自身の活動を継続させるためにパトロンとの出会いを求めている。この2者をつなぐためにオーディエンス（観客）に訴えかけるという公演であったため、3者の距離はぐんと近づいたに違いない。それは、公演直後、観客として来られていた方がその場でメセナ会員に登録されたという結果が物語っている。そして、服飾研究会のファッションショーを観て、自分もモデルとして出演したいというお子さんもおり、オーディエンスがパフォーマーになるという予想外な結果も与えてくれた。

また、4つのジャンルの違う団体に出演してもらったため、オーディエンスにも各団体の公演の時とは違った変化があったはずである。それぞれの団体についているファンは、今回の公演で普段は観ないであろう文化芸術に触れることができた。これも一つの成果であると筆者は考えている。新しいジャンルの文化芸術を観るには、なにかきっかけが必要である。今回の公演を機に、様々な活動のオーディエンスが増え、そしてパフォーマーの質が上がることも考えられる。これらの成果は、この公演によって生まれたものであり、今回の活動が山口の文化芸術を活かした「地域創造」の一役を担ったことは間違いない。（文責：森田）

5.「Yamaguchi Fashion ― 田園、都市そして海との共生 ―」の開催

（1） ファッションショーの構成・演出

全国メセナネットワーク協議会と山口メセナクラブ主催の第14回全国メセナネットワーク山口大会「メセナがつなぐ町づくり」における文化講演会は、15周年を迎えた山口メセナ倶楽部「読売メセナ大賞」受賞団体による披露として行われた。今回は4つの団体だけが共演することになった。その他の団体も当日のスタッフとして参加し、地域の芸術・文化団体の協働の場となった。

以下では今回のコンセプトや全体の構成・演出を担当した水谷が、全体の概要を述べる。次に具体的な作品は岡田奈緒が子供服「大地の妖精」、次いで田村未奈美が「ジャポニスムと海」をテーマに作品を発表したので、それについてのコンセプトや作品制作および発表した結果について述べる。最後に「デニムキモノ＆柳井縞」について、水谷が述べる。

（2）「Yamaguchi Fashion － 田園、都市そして海との共生 －」

今回のショーの趣旨が全国メセナネットワークの関係者の方を招き、同時に地域の方々にも見てもらうというものであった。それ故に、テーマに沿って地域の自然や文化を表す特徴ある資源を映像で表現することにして、ショーのイントロとして流した。これは、入江正敏氏（山口メディア研究所長）に依頼した。

作品のテーマ設定について、ここで触れておきたい。2007年夏に山口県立美術館とタイアップして、山口市中心商店街を舞台に、「アグリ・アート・ツーリズム」（注11）のイベントを実施した。この時、田園をテーマとして、アートとファッションそして農業の融合を図る企画を立てた。特にファッションの創作においては、モンペなど農作業着を参考に、新しい街着にもなる農作業着をデザインして発表し、商品開発も実施した。

今回の田園をテーマにした作品は、その延長にあるもので日本の着物の単純な構造やモンペや農作業着用の帽子など、田園風景を彩る服飾文化を参照してデザインされたものである。最初にショーの発表順に構成と担当者を述べる。

プロローグ 「大地の妖精」
　　デザイン・制作　岡田奈緒
Part1 「田園と都市の共存」（写真21）
　　デザイン・制作　田村智香
Part2 「田園から都市へ」（写真23.24）
　　デザイン・制作　田邉千壽/大矢真理奈
Part3 「ジャポニスムと海」
　　デザイン・制作　田村未奈美
Part4 「デニムキモノ＆柳井縞」
　　デザイン・構成　水谷由美子
　　帯・プロダクト　石田忠男（柳井縞の会会長）
　　着物・プロダクト　岡部隆則　岡部泰民

（3） 子供服「大地の妖精」

筆者は、この度のファッションショーでプロローグを担当し、そこで子供服を計3作品（写真22）発表した。タイトルは「大地の妖精」である。コンセプトは、この度のテーマ「田園と都市、そして海との共生」の中の「田園」に重点を置き、山口にも数多く残っている田園風景や、そこに存在する静寂さ、色彩などから着想を得、その広い大地に存在しているような不可視風景の一つである「妖精」をイメージし、表現したものである。

制作の過程において、妖精の持つ透明感や浮遊感を表現するために、シンプルな白地の布を主に使用し、さらに6色のオーガンジーも使用した。オーガンジーは扱いが困難であったが、それぞれ違う素材の布2枚を縫い合わせて1枚にすることで、想像していたようなボリューム感を出すことができた。装飾品として、田園の持つ自然の雰囲気を強調するために、造花の髪飾り（カチューシャ）も合わせて制作した。

モデルについては筆者が参加した地域活動の縁で出会った子どもたち（山口大学教育学部附属山口小学校の3年生女生徒3人）にモデルをお願いすることで、子ども達にしかないかわいらしさや無邪気さを取り入れることができ、より妖精の世界観を伝えることができた。

改めて各作品のアイテムの特徴は共通して、田園で使用する作業着の一つであるもんぺから着想を得たパンツとノースリーブのドレスである。それぞれ異なったデザインのエプロンがドレスのスカート部に重ねてつけられ、背中には妖精の持つ「羽」をイメージして大きなリボンをデザインした。

ファッションショーでは、田園を楽しそうに走り回る妖精を表現するために、ステージ上で3人がとび跳ね、踊るようなパフォーマンスを行った後、一人ずつが前に出て衣装を披露する形で発表した。ちなみに、一人一人のポーズは子どもたち自らが発案したものである。また、白地とオーガンジーが映えるように真っ暗なステージに緑や黄色のペールカラーの照明を使用することで、コンセプトで述べたような幻想的な空間を生みだすことができた。

筆者自身、この度のファッションショーは人生初の経験であり、作品の技術面や完成度などにおいてかなり未熟な点が多かったように思う。しかしながら、今回のショーの成功は、水谷教授のご指導はもちろんのこと、子どもたちの積極性や好奇心、そして子どもたちの家族の理解と協力があったからこそであると考える。初対面の子どもたちと共同で一からファッションショーを作り上げていくという試みは困難ではあったが、筆者にとってコミュニケーションの重要性や、難題と正面から向き合うことの大切さを学ぶことができた場でもあり、自分の成長にも繋がった素晴らしい機会であった。また、この度のファッションショーを見た家族から、次回のショーでモデルとして参加させてほしいという要望が出ており、地域に向けた新たな分野の文化発信の一歩を踏み出せたように感じる。同時に、山口市出身ではない筆者にとっては、この度のファッションショーのおかげで、学生生活のみでは得ることのできない特別な出会いを経験し、地域交流の輪が広がったことも喜ばしいものであった。非常に貴重で、有意義な体験ができたことに感謝したい。（文責：岡田）

（４）「ジャポニスムと海」

筆者は今回、「ジャポニスムと海」というテーマで計6点の作品を発表した。

まず、「海」をテーマにした作品では、セーラー服やヨットパーカーなどのマリンスタイルをイメージした作品を4点発表した。三方を海に囲まれた山口県で、海をステージとした新しいライフスタイルを感じさせるファッションの提案を考えた。

主に、リアルクローズ寄りのシンプルかつベーシックな作品であったため、コレクションなどでキャットウォークをウォーキングするようなイメージの演出を試みた。直線的な動きとシンプルなパフォーマンスであってもインパクトがある印象を与えるため、モデルの身長は170cm代に設定した。

特にモデルについては、2008年に中国青島大学主催のファッションショーに参加した時に、モデルコースの学生がモデルを担当した経験を持つ。この時に作品の見せ方に対する新たな視点が生まれた。世界におけるプロモデルは170cm以上が常識となっている。それ故に、作品がどこの国で発表されても一定のバランスを保つことが可能である。こうした経験から、今回も身近な学生の中からかなり苦労して170cm以上の身長のモデルを探し、それが実現した。

①「海」

1点目の「marine1」は、フード付きのAラインワンピースである。バストの部分は折り返しになっており、バックから見るとセーラー服の襟のように見える点がポイントである。また、フードは風になびく軽い素材で、取り外し可能のため、シンプルとカジュアルの2Wayを楽しむことができる。（写真15）

2点目の「marine2」は、シンプルなシャツとショートパンツのコンビネーションである。ポイントは、２本のラインが入った幅広のカフスと、ウエストに付けたヨットパーカーをイメージしたナイロン素材のバックである。ここでは、スポーティーでカジュアルなスタイルを表現した。（写真16）

3点目の「marine3」は、着物の羽織に着想を得た上衣と巻きスカートである。フードとポンチョが一体化したミステリアスなシルエットの上衣は、動作に合わせていろいろな動きを見せる。スカートは、ハイウ

エストで2本のラインを入れた。（写真17）

4点目の「marine4」は、ボレロ、コルセット風ベアトップ、ロング巻きスカートの3点から成り立つ。フードのパターンを用いたボレロは、「marine1」のフードと同じく風になびく素材でフェミニンなシルエットである。また、巻きスカートのウエスト部分はセーラー服の襟をイメージした。（写真18）

②「ジャポニスム」

次に、「ジャポニスム」をテーマとした2点の紹介をする。これらの作品は、2008年6月に青島大学卒業制作発表ファッションショーに招待を受け、発表した作品である。同時に上述したように、青島大学のモデルのサイズを想定してデザインした作品である。

青島大学では学生デザイナーの意識の高いモデル選びや、モデル自身の表現力に刺激を受けた。それ故に、ここでのモデルにもまた、国際的な目線を意識し、身長170cm程度のモデルを設定するとともに、身体の表現力が豊かな人を選んだ。

全体に、多くの方に作品のデザインだけでなく、モデル選びや全体の見せ方のレベルが以前よりも豊かになったと評価を得た。いろいろな角度からの経験を持つことで、総合的に表現力が充実して来たことは非常にうれしく感じる。

これらの作品のコンセプトに、「花魁」の陰のイメージを考えた。日常から切り離された煌びやかな世界に住むものの、実際は廓の中に閉じ込められ、恋愛すら許されない、不自由な拘束された女性の陰のある美しさの表現を目指した。

ジャポニスムをイメージした作品のモデルウォーキングは、最初にパフォーマンスした「海」の作品と比べ、２倍ほどゆっくりとした歩きに演出した。また、着物用の少し濃い白粉を使い、全体の化粧では和風の着物用のメイクを参考にした。

具体的には1点目の「漆黒（Japan black）1」（写真19）は、コンシャスなミニドレスと羽織である。華々しい場所で活躍する彼女たちの心に落ちる陰を喪服の着物の羽織をリメイクして制作した。着物の鮮やかな裏地やゴールドのデニムの裏を使用したふき（着物の裾が綿入れになっている部分）などにデザイン上の特徴がある。そこでは表と裏の色彩のコントラストで陰陽を表現し、伝統的な着物の要素をディテールに残したドレスでは、伝統的な女性のイメージを表すことを意図した。

また、花嫁衣装で用いられる綿帽子に着想を得たフードには、間夫（本当に思いを寄せる男）と一緒になるという叶うことのない儚い思いから、廓の中から外を見つめる花魁の憧れと現実という相矛盾した現実と女性の心情を表わそうとしたものである。

2点目の「漆黒（Japan black）2」は、バッスル風ロングドレスである。「漆黒（Japan black）1」と同様に、黒地の着物、ゴールドのふきに鮮やかな原色の着物を裏地にもってきたロングドレスである。腰の部分には帯を使用している。また、バッスルのヒップラインを作るためのファンデーションとして、クロワッサンを使用した。顔の周りを覆うフードは、命も顧みず、足抜け（廓から逃亡すること。捕まると酷い仕置きを受け、命を落とすこともあった）しようとする姿から想像した。（写真20）

今回のファッションショーを通して、リアルクローズからアートまで、幅広い作品の制作を手がけることができ、大きな自信に繋がった。また、見せ方としても、今回はモデル選び、パフォーマンスに力を入れることができ、それがよい結果を導いてくれたと思う。（文責：田村）

③ 「デニムキモノ＆柳井縞」

デニムキモノは、2008年にカイハラ株式会社から生地提供を受けて創作した。まず、１作目は一般的な着物の形を基本として、背中にサンドブラストで鳳凰のモチーフを描いた。帯はインドネシア、チレボンの伝統模様の生地から創った。特に０番ステッチを要所に施し、繊細さと力強さを対照的に表現した。この場合には、すべて着物を縫い上げてからステッチを入れる方法だった。モデルは非常に女性的な身体表現をすることで、繊細さと女性らしさが表出された。

1作目（写真25左）はあえてオリジナルな広幅の帯だったこともあり、研究室メンバーである着付けのプロである西脇末美氏に依頼した。それ故に、この種の帯は自分で容易に結ぶことが難しいもので、着物離れの原因ともなる。

2作目は（写真25右）、自分で着られること、デニムの特性を生かしたデザインそしてリラックスしたデザインを目指した。そのために、まず男性用と同様の着流しスタイルとし、帯は小幅にした。しかも、江戸時代初期の女性が同様に小幅で前で結んでいた着方を採用した。

この時代の女性の着物は多くの絵画資料が表しているように、非常にリラックスした着方で装われている。今回は、地域の服飾の伝統的な資源である柳井縞を復興させた柳井縞の会（柳井市）会長の石田忠男氏に海の街柳井をイメージして、デザイン提案をして、織っ

てもらったものだ。帯が小幅なので、男性の着流し風と同様に、比較的低い腰の位置で帯を結んだ。このケースでは、自分で容易に帯を結ぶことが可能であり、自律的に着物を着ることが可能となる。デニム本来が持つ、自由、ユニセックス、自律、そしてアヴァンギャルドなどのイメージを伝統的な着物というアイテムのイメージと掛け合わせてみることを試みたものである。

着物のデザインについては、デニムシャツやジージャンの構成テクニックと伝統的な着物の構成テクニックを融合させることを意図した。本来、着流しの着物の身長との調整は、胴部に縫い込めるものだが、今回はヨークの位置に余分な布を持って来た。さらに、着物は裏に来るタック分の布は下にたおす。しかし、これをシャツ風あるいはジージャン風にステッチを入れるとなると、上にたおさなければならなくなる。

ディテールの問題だが、最終的に生まれる着物のイメージにステッチは重要な役割をする。今回は8番ステッチを用いて、ステッチを的確に入れるために、それぞれのパーツを縫いつけながら、それぞれのタイミングでステッチを入れる手法をとった。しかも、すべて工業用のミシンを用いている。今回は、筆者が着物の裁断と構成をして、研究室メンバーである岡部隆則が着物を縫製した。

モデルは髪が長いきれいな女性だった。彼女はデニム素材で男性的な着物を見事に着こなし、新しい着物の形、着方を提示できたと考える。それよりも、カジュアルで男性的な着物のイメージとは対照的な新しいやさしくかつ凛々しいような女性のイメージが立ち上がったのである。（文責：水谷）

６．おわりに

今日、経済産業省中小企業庁主催のジャパンブランド育成支援事業や地域資源活用プログラムなど、多数の地域資源を活用する国の助成事業があり、日本の各地の地域資源を活用した商品開発プロジェクトが展開している。それらは、日本のデザインウィークや世界の見本市などにも出店されている。さらに、具体的に商品となり店舗販売にも至っているものも多くある。

山口においても、萩竹ブランド化推進協議会の竹を活用するプロジェクトは、2004年度第1回ジャパンブランドに採択され、2005年度から本格的にデザイン開発や、現在では工場を建て、竹製品を国内外に発信するまでに発展している。これは一つの成功例である。

筆者は2004年に開催された萩開府400年記念の「竹が創る21世紀 － 竹meetsフィンランドデザイン」プロジェクトの立ち上げ、展覧会やファッションショーの企画、そしてジャパンブランド申請に係る基礎提案者として参加した。こうした流れの中で、地域資源を生かした商品開発や地域産業の活性化に、さらに貢献して行きたいと考え活動をしてきた。

筆者は専門であるファッション分野では、「竹が創る21世紀 － 竹meetsフィンランドデザイン」で商品開発のディレクションを実施した。さらに、ジャパン・ファッションデザインコンテストの延長で山口県繊維加工協同組合が地域からデニムファッションブランド匠泊山を立ち上げたことは先に述べた。上記組合は、地域のジーンズ企業を束ね、ジェトロ山口の支援を受けて、コンテストとともにジャパンジーニングコレクションを山口で立ち上げた。そして、バルセロナで開催されたカジュアルウエアの見本市「ブレッド＆バター」2008年、2009年の両年に、ブースを出展した。筆者も2008年度の見本市に参加した。

このように産業界に対して側面的に貢献できることをしてきたが、基本は大学人という立場から、直接的に産業を視野に入れた活動を目指すものではない。むしろ、文化・芸術振興の側面からファッション文化の創造活動を主に実施することが課題である。2000年から産官学で実施し始めたファッションコンテストは、後に匠山泊ブランドを生み出す土壌となった。

また、第21回国民文化祭やまぐち2006は、デニムをテーマに展開を続けてきたジャパン・ファッションデザインコンテストと連動して、デニムをテーマにしたファッションフェスティバルを実施することから、地域産業の新たな付加価値を生み出す契機ともなった。同時に一般市民に対して、山口県にはジーンズファッションの製造拠点が集積していることが周知された。

国民文化祭以後、山口市中心商店街ではジーンズ生地や既製品のリメイクなどのコンテストが継続されている。また、高校生、大学生さらに一般市民の個人やグループを対象としたファッションコンテストが2002年から継続的に実施されて来たが、デニムを使用した作品を作る傾向が高まっている。

このように、山口とデニムはこの10年間の間に分かち難い関係が築かれて来た。同時に、山口で実施された国民文化祭の成果として、地域の老若男女がデニムを用いた装飾品や衣服を制作する活動を通じて感動を共有した。それがきっかけで、いくつもの創作に興味を持つグループのネットワークが出来上がってきた。文化・芸術活動として上述したマスクの創作とパ

フォーマンスを通じた異世代間のコミュニケーションなどは、このネットワークを基盤として実現されたものである。属する年齢や地域によって、それぞれに忙しいスケジュールが展開されているために、なかなか主催者が適当と考える時期に、効果的にイベントを実施することが難しいことは、今回のマスクやコンテストの参加状況から多く学ぶことがあった。

山口メセナ倶楽部からの助成活動の結果、山口県立大学服飾研究会は1998年と2000年の2回、読売メセナ大賞を受賞した。山口サビエル記念聖堂およびJR西日本山口線SL山口号などで実施したファッションショーである。前者は「サビエルの道」をテーマに、山口とサビエルの人生が関わりをもった歴史的、空間的特徴をファッションショーで表現したものであった。SL山口号を借り切って行ったショーでは、「SL山口号C571－未来への旅－」をテーマにSLの旅を未来への旅に見立てて、観客とパフォーマーがともに旅をするものであった。下車した街でもショーを実施するなど、壮大な規模のものであった。

研究室の活動は、上記したようにまさに地域の経済的および人的な支援を受けて可能となった。また地域からも創造の契機が与えられてきた。16年間の継続的活動を通じて、豊かなネットワークが展開し、その結果、ファッションショーやアート活動が地域の創造的基盤創りに少なからず関与してきたのだ。

これは個人のアート活動とは異なり、常に地域資源を発掘し、独自の角度で創作の着想源としていること、また地域の人々との連携によって運営することなどから、地域の人々の共感を生み出して来たのである。

ジャパン・ファッションデザインコンテストは2000年に始まり、今年11月に10回目が開催されて幕を閉じた。このコンテストは、プロを目指す登竜門として全国の若者に貢献して来た。今後は、クリスマスファッションショーなど2002年から山口県民や山口市民を対象に実施して来たファッションコンテストとデニムをより強く結び付けていくことでより特色を出していくことが一つの課題である。

さらに、地域で創作活動をしている個人やグループを結び付け、ファッション＆アートの祭典を充実させることも課題である。地域での創作活動が、よりオリジナリティー豊かなものとなり、内外からも関心を持たれるようなファッション＆アートフェスティバルが開催されることを夢見て、ファッションの創作とともに企画・プロデュース力を高めていきたいと考える。（文責：水谷）

注

（1） 水谷由美子・入江正敏・永冨真子 「ファッションを通じた日・西の国際文化交流と地域文化発信の実践的研究：ナラバ州における'Yamaguchi Meets Navarra 2005'を事例として」『山口県立大学大学院論集 7巻』 山口県立大学、2006を参照。

（2） 水谷由美子・岡部泰民・入江幸江共著 「ファッションと産学共同：ジャパンファッションデザインコンテストIN山口実施の実例研究」『山口県立大学大学院論集 5巻』 山口県立大学、2004年を参照。

（3） 水谷由美子・井生文隆・松尾量子・田中輝雄・岡部泰民・入江幸江・磯部素男・永冨真子・神大樹 「産民公学連携によるファッション文化の発信と地域文化の創造：第21回国民文化祭・やまぐち2006ファッションフェスティバルの実践的研究」『山口県立大学大学院論集 8巻』 山口県立大学、2007年を参照。

（4） 塩沢由典・小長谷一之 『まちづくりと創造都市 －基礎と応用－』 晃洋書房、2008年。

（5） リチャード・フロリダ 井口典夫訳 『クリエイティブ・クラスの世紀 －新時代の国、都市、人材の条件－』 ダイヤモンド社、2007年。

（6） 「モーリ・マスク・ダンス」とは、日本古来の「能」をイメージし、戯曲、美術、衣装、振り付けがミックスされた仮面舞踏劇である。1988年に石川県立能楽堂での第1回目公演「モーリ・マスク・ダンスPart1去来」に始まり、2008年までに、14回の公演が行われている。

（7） 水谷由美子『毛利臣男の劇的空間 – 舞台・ファッション・アート -』繊研新聞社、2006年。

（8） 地域ブランドNews「日経リサーチが「地域名称」と「名産品」の地域ブランド調査を実施」地域ブランド総合研究所
URL：http://tiiki.jp/news/org_news/12chiikibrand_SP/2006_06_02nikkeiR.html（アクセス日2009/10/23）

（9） 素材提供：山口県繊維加工協同組合

（10） 商品デザイン：エコバッグ 田村智香（山口県立大学国際文化学部文化創造学科3年）、ポーチ 大矢真理奈/三角巾・帽子 田邊千壽（山口県立大学生活科学部環境デザイン学科4年）、指人形・パズル 岡田奈緒（山口県立大学大学院国際文化学研究科1年）、グラフィックデザイン大

熊和樹（山口県立大学国際文化学部文化創造学科3年）
(11) 水谷由美子・神大樹・礒部素男・片山涼子・永留靖洋「山口市における産公学連携によるアートがある街の創造：アグリ・アート・ツーリズムの実践的研究」『山口県立大学大学院論集 9巻』山口県立大学、2008。

1　マスクづくりワークショップ
会場風景（山口県立美術館講座室）

4　マスクづくりコンテスト
ステージに向かう子ども達（山口市米屋町商店街）

2　マスクづくりワークショップ
毛利臣男氏と子供たち

5　マスクコンテスト
参加者のパフォーマンス
（山口市みずほ銀行前特設ステージ）

3　マスクづくりワークショップ
完成したマスクをつけてポーズ

6　マスクコンテスト
毛利氏の総評

7　街知箱　店舗外観（山口市中市商店街）

10　商品陳列模様１（街知箱内部）

8　街知箱店舗内模様

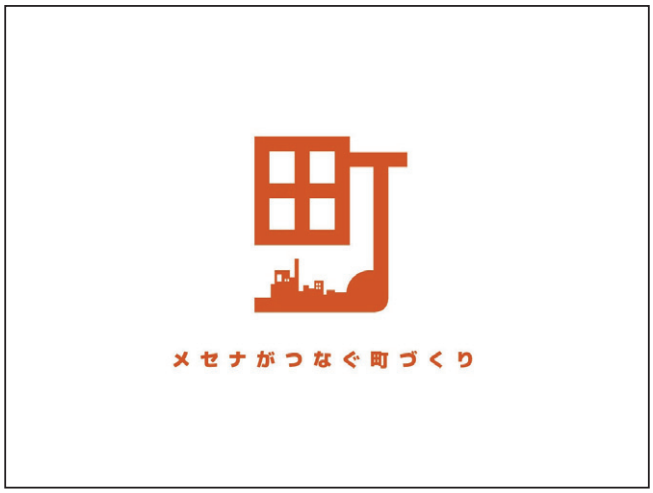
11　商品陳列模様２

9　街知箱店舗内模様

12　商品陳列模様３

13 「メセナがつなぐ町づくり」
全体企画用チラシ
デザイン　眞鍋廣亜貴

デザインコンセプト
メセナと芸術家達が手を取り合うことで、その土地に新たな文化芸術が切り開かれていくことをイメージする。



14 「メセナがつなぐ町づくり」
文化公演用チラシ
デザイン　眞鍋廣亜貴

デザインコンセプト
メセナ倶楽部が山口の文化活動を支えているということを象徴するように、メセナ倶楽部を、まちを明るく照らしている街灯に見立てて表現する。

15

17

16

18

15　田村未奈美「marine １」セーラー服の襟から着想を得たフード付きワンピース
16　田村未奈美「marine ２」スポーティーなシャツ、パンツ、バッグのコンビネーション
17　田村未奈美「marine ３」ミステリアスなシルエットの上衣と巻きスカート
18　田村未奈美「marine ４」フードからイメージしたボレロ、コルセット、ロング巻きスカート

19

21

田村智香（国際文化学部文化創造学科３年）
「田園と都市の共存」田園と都市の時間の流れの対比の表現

20

22

岡田奈緒「大地の妖精」

19　田村未奈美「漆黒（Japan black）１」綿帽子から着想を得たフード、羽織、ミニドレス
20　田村未奈美「漆黒（Japan black）２」喪服を用いたバッスル風ロングドレス

23

田邉千壽
生活科学部環境デザイン学科４年
「田園から都市へ」なつかしさを感じるおしゃれな農作業着

24

大矢理奈
生活科学部環境デザイン学科４年
「田園から都市へ」山口の田園風景に着想を得て

25

デザイン・構成　水谷由美子
帯制作（右）石田忠男（柳井縞の会会長）
着物制作（右）岡部隆則
「デニムキモノ＆柳井縞」